

# 京のきもの文化

伝統の継承と新たなきもの文化の創出



## 京のきもの文化 豆知識

西陣織のまち「西陣」。名前の由来は？

応仁の乱で京都の街は焼け、職人は各地に四散しますが、戦乱が終わると戻った職人が、西軍の陣地跡で織物業を再開し、まちは「西陣」と呼ばれるようになりました。

「十三参り」ときもの関係って？

十三参りは、数えて十三歳になる男女が寺社にお参りする行事です。女子は、大人への区切りとして、子ども用に仕立てた「四つ身」のきものから、初めて大人の「本身裁ち」のきものを肩あげして着ます。

しっかい「悉皆」って、どんな仕事？

西陣織や京友禅など、京都のきもの生産工程は、複雑に細分化された分業制が特徴です。注文された品をあつらえるため、「悉皆(しっかい)」「染匠(せんしょう)」と呼ばれる職種が存在し、各工程をつなぐコーディネーターのような役割を果たします。

「辻褄があう」の辻褄って？

「辻」とは、縫い目が十文字に合うところ、「褄」とは、裾の左右が合うところをいい、「辻褄があう」で、前後がきちんと合って、筋道を通ることをいいます。「襟を正す」や「折目正しい」など、日本語の中には多くのきものに由来する言い回しがあります。

京好みのきものって？

京都では、宮廷文化の流れを汲み、落ち着いた色彩の中にも華やかさの感じられる、はんなりとした印象のきものが好まれ、きもの、帯、小物の合わせ方もめりはりをつける江戸好みに対し、馴染みの良いのが京好みといわれます。

### きものを着よう!!

京都はきもの映えるまち。きもの関連のお店も多く、きものに親しみやすい環境です。「上手に着られない」「場面や季節に合った着方などのきまりごとが難しい」という声もありますが、それらを気にするあまり、きものから遠ざかってしまうのはもったいないことです。まずは気軽に着られる普段着から、きものでおでかけしてみましょう。

📌京都市では春分の日を「伝統産業の日」と定め、きもので参加するイベント等を実施

📌きものを知る、深める情報

(公財)京都和装産業振興財団HP「きもの日本」  
<http://www.wasou.or.jp/>

📌きもの姿で特典が受けられるなどの取組

「京都きものパスポート」  
<http://kimono-passport.jp/>

きもの文化は、茶道、華道、能・狂言、日本舞踊など、多くの伝統文化と相互に支えあう存在であり、和の文化の象徴です。

京都市では、きもの文化の魅力を発信するとともに、「和装」のユネスコ無形文化遺産登録を支援していきます。

市民の皆様にも大いにきものを着ていただき、京都にとって、日本にとって、なくてはならない「京のきもの文化」を未来へ引き継いでいきましょう。

京都市長 門川 大作



京都市文化市民局文化財保護課

〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル 2階 ☎075-366-1498

kyo-tsunagu.net 平成28年3月発行 京都市印刷物第275542号



## 選定にあたって

きものは長い歴史の中で受け継がれてきた、日本が世界に誇る民族衣装である。「きもの」は、「洋服」に対する言葉として、「和服」を指して用いられ、今では「kimono」として国際的に通用する衣装になっており、外国の方がきものを買求めることも少なくない。

京都は、山紫水明の自然、1200年を超える歴史の中で人々が築いた景観が相俟って、美しいまちを形成している。そして、京都の人々は、自然に対する畏敬と親しみの念を持ち、四季の移ろいを大切にしながら、豊かな文化を創造してきた。きもの文化は、このような京都の自然、まち、人々により育まれた。

また、きものは、茶道、華道、香道、能・狂言、日本舞踊といった、我が国固有の文化とともに、発展してきた。現在でも、京都には、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元、花街、町家など、「和」の文化の源泉が存在しており、京都は日本のきもの文化の中心となっている。

その歴史は、平安時代からの宮廷を中心とした「みやびの文化」の広がりとともに、様々な技術・技法・意匠を用いた手工業が発達、集積してきた。なかでも、京都の伝統産業を代表する「西陣織」は、平安京に設けられた「織部司」がもととなり、その高い技術は世界的に認められている。「京友禅」は染色技術が発達した江戸時代に創案され、その華麗な意匠は、憧れとなっている。京都のきもの生産工程は、多品種少量の高級品生産に応えられるよう、分業が著しく発展しているのが特徴である。

京都では、歴史や文化を背景に、繊細な職人の技による、形、色、模様のすべてに和の文化の粋が投影された、日本の美意識の集大成ともいえるべき、伝統と格式を備えたきものが、維持継承されている。

このようなきもの文化は、最大の生産地、集散地としての強固な産業基盤の支えにより発展し続けているが、近年、生活様式の変化などにより、きもの消費は落ち込み、後継者の不足で貴重な技術が年々失われるなど、その基盤が揺らいでいる。

一方、和の文化を再評価する気運の高まりとともに、和のエッセンスを取り入れつつも、格式にこだわりすぎず、現代的なファッション感覚で気軽にきものを楽しみたいというニーズが高まっている。そして、京都は、きもの文化の中心として、こうしたニーズに応える新たなきもの文化を創出し、全国へ発信していく役割が期待されている。

「伝統の継承」と「新たなきもの文化の創出」、京都には二つの面が求められているが、伝統を守りつなぎながら、時代の変化に即して新たな文化を創出し、両者の共生を図るなかで、懐の深い重層的な文化を作り上げてきた姿こそが、京都のきもの文化である。

我が国には日常的に民族衣装であるきものを着る習慣が今も残り、また民族衣装を大切にしようという動きが広がっている。グローバル化が進んだ現代において、海外の人々をも魅了する、四季の変化に富んだ豊かな風土に育まれた独自の感性が凝縮された、和の文化を象徴する存在としてのきものは、市民の誇りであり、守り継がなければならない我が国の貴重な財産である。

京都、そして日本になくてはならないきもの文化が、悠久の歴史が育んできた優れた美意識、伝統の神髄を継承しながらも、現代の感性で意匠や着こなしを変えつつ、未来にわたって市民生活の中で愛され続けていくよう「京のきもの文化—伝統の継承と新たなきもの文化の創出」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

平成28年2月

## 【きもの成り立ちと現状】

平安時代には、男性の束帯、女性の十二単が貴族の装束であり、武家社会に移ると、袖丈の短い小袖が主流となりました。江戸前期には、染織の技法が発達し、帯の結び方、髪形、小物の細工なども凝ったものが生み出され、明治以降は、洋風の柄が見られるようになりました。



## 【きもの魅力】

- 四季を持つ日本の美意識や奥深い和の文化が表現されています。
- きものと帯や小物の組み合わせで幅広いお洒落が楽しめます。羽裏(はうら)や襦袢(じゅばん)など、隠れたお洒落も楽しみの一つです。
- ほどけば一枚の反物に戻り、多様な仕立て直しが可能のため、子や孫へ受け継がれるものも多いです。
- 長く着るため、季節ごとの虫干しなどに気を配る中で、ものを大切にすることが育まれます。

## 【京都のきもの文化を支える技・ひと・道具】

京都のきもの生産工程は分業制が特徴で、各工程は高度な技術を持つ専門の職人が担っています。分業制のもと、職人が関連性を持ちながら効率的にきものを生産するため、西陣織の西陣界隈、京友禅の堀川界隈など職人が集まって、まちを形成しています。また、流通を担う呉服商も室町、新町界隈に集まり、まちを形成しています。

織機、杼(ひ)、刷毛などの道具、絹、綿、麻などの原材料、作り手や売り手のみならず、きものを着る人、愛でる人など、きものを扱うすべての人々により、きもの文化は、支えられています。



## 【きものと和の文化】

きものと茶道や華道などの文化、宮参りや七五三などの儀式や行事は密接に関わっています。また、能装束、法衣や神職の装束、祭の装束などの存在は、きもの文化を重層的なものにしています。きものは、色や柄のなかに、日本特有の季節、風物を表現したものが多く見られ、自然と深く関わり、季節感を大事にしてきた日本人の感覚、和の心が色濃く反映されています。



## 【伝統の継承と新たなきもの文化の創出】

京都では、茶道や華道の稽古事などに関連して着る機会が多いこと、行事の際に「ハレ」のきものを着る慣習が色濃いこと、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元など「和」の文化の源泉が存在することから、伝統と格式を守ったきもの文化が維持継承されています。一方、現在は、自分らしく自由にファッションを楽しめるきものも求められています。

